



源氏繪寶枕

三





紅印

篝火 おぼろ火

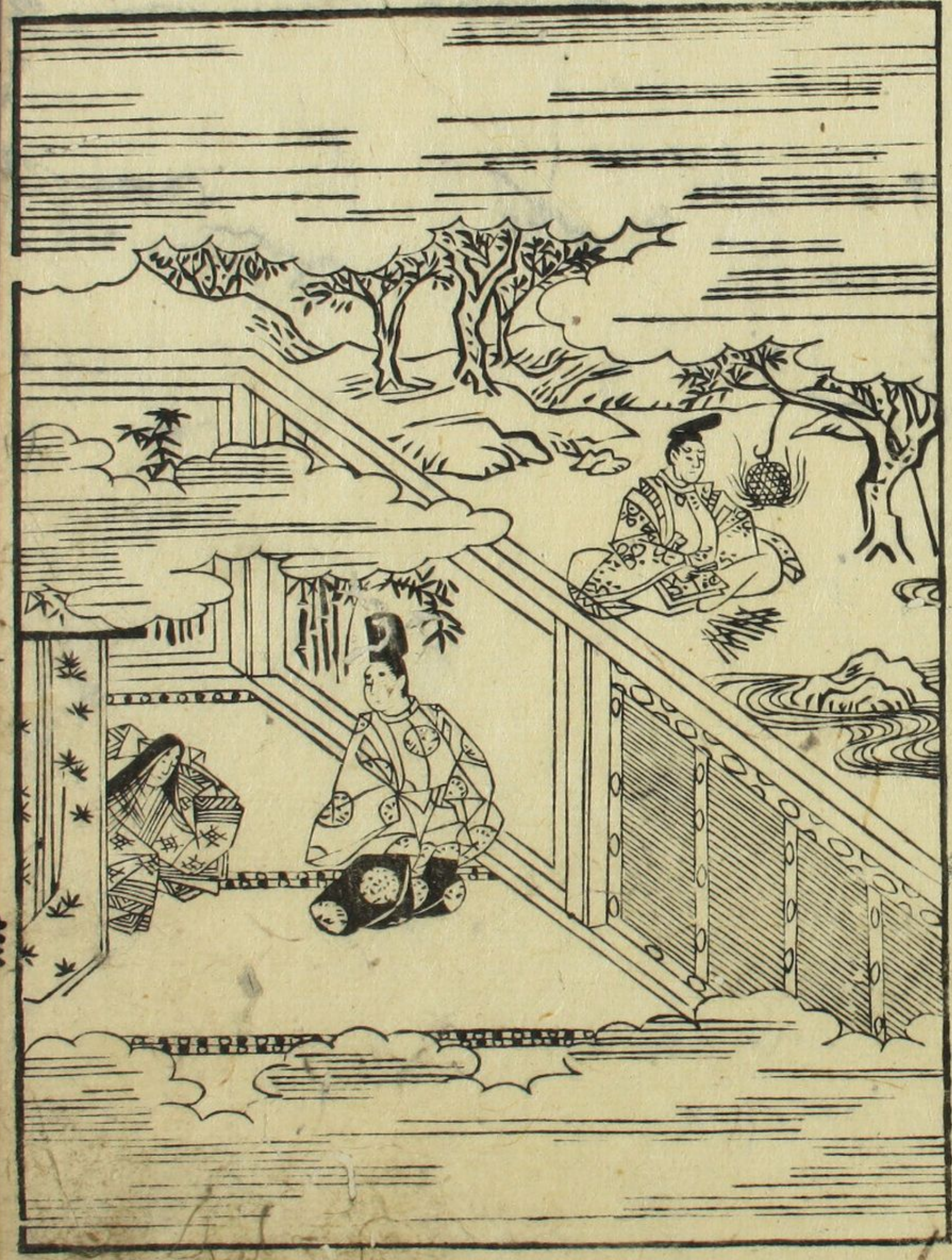
源氏物語方と云ふ人の志願ふと云ふも彼乃侍子なる
 孫と侍公の由の昔の由のさみあそびんをさしはると
 思ふて夏乃物れ月を記はかろのねるきと云ふ
 篝火と云ふもしては彼と云ふ人さそふを時記
 ありし火よ立ちふ悲乃きつりこそむよな
 あしとねほのなるわけき

野々口氏立圃

篝火色

螢もひらる

源氏ゆ飛

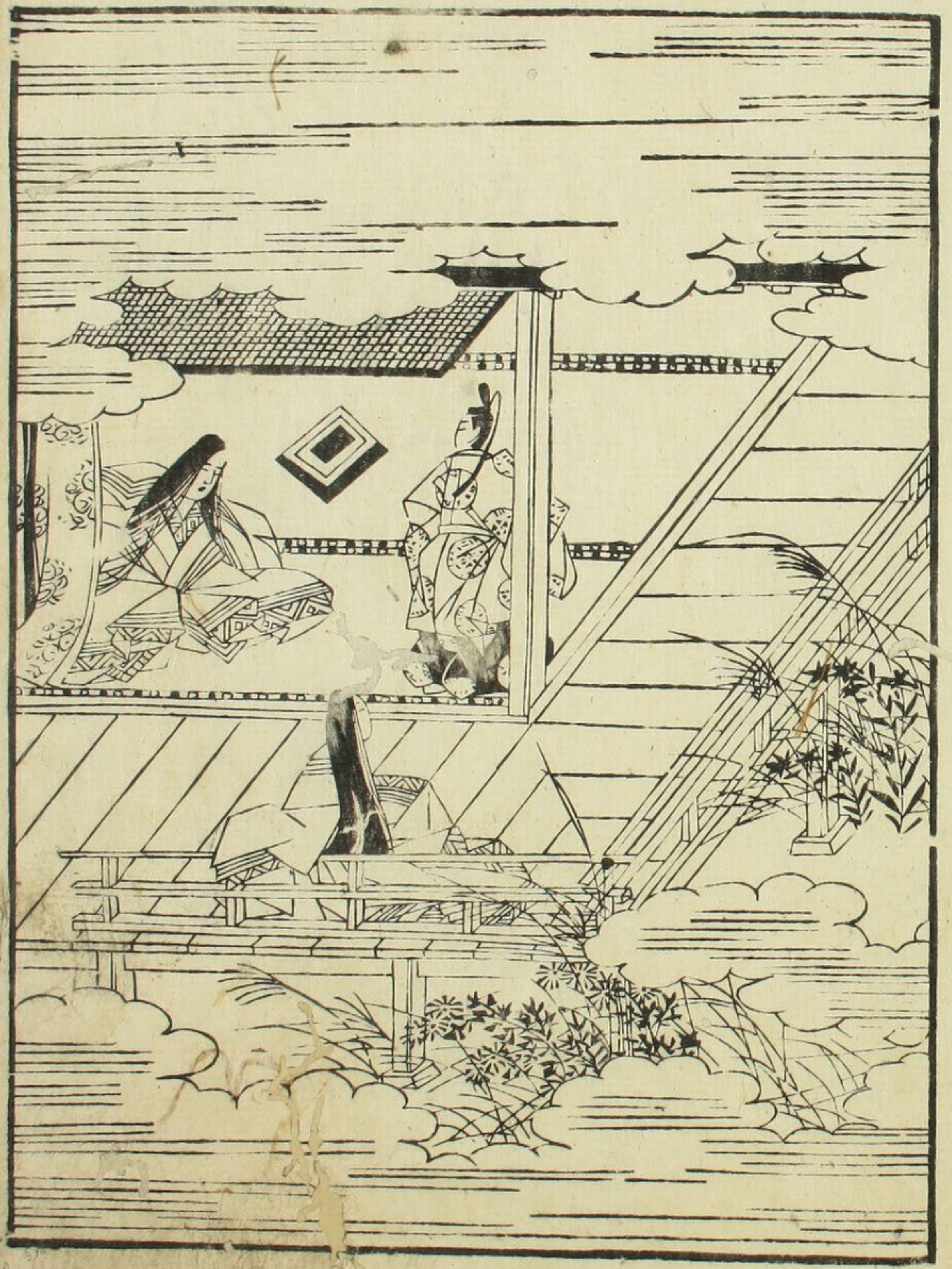


野分 玉警方おるひ

比る八月は大雨吹て物さうくくあううに孫はんこ
源氏のい子夕暮かれしうこ中おまそおひま
きはかろき井の房とよかひいといこれ姫君はぬ
くふふけく見さうに終ふはさうこのおの
姫君は御前のこひてはなれうあうう乃清の
風さうれむくあまのう夕つあもといひ
まあくといひく終ぬ君

棟梨氏一雪

風う外人も花見の野分くれ



蘭 玉つらね

夕霧の大将玉装束の内侍をうらまへしむけに
北は許へ梅の枝をゆきあはれおたり
みほり

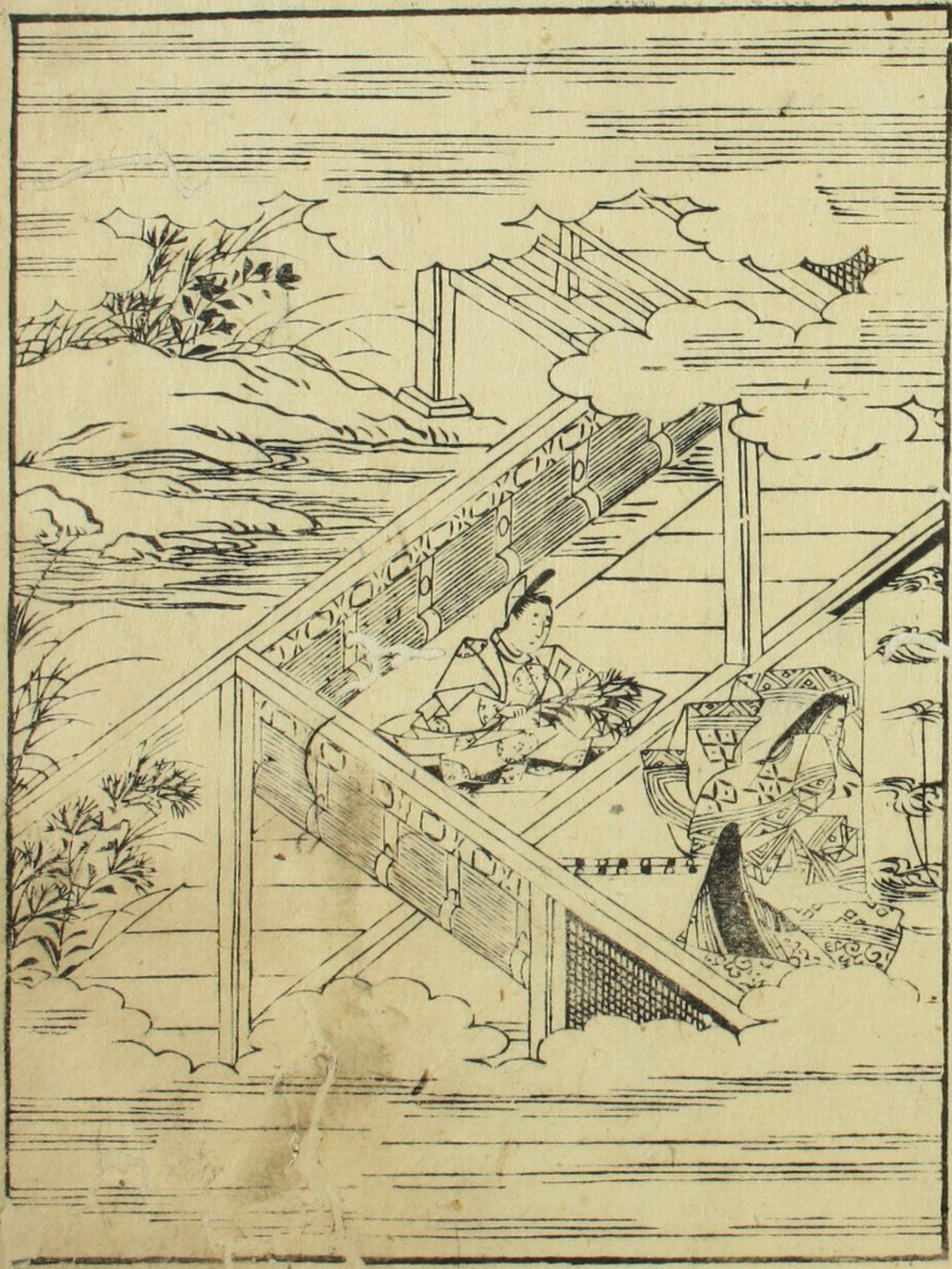
おかしき花は露おちよみ
うけよあしはらとよみ
良

服部氏定清

源氏酒

くゆせし孔義也

藤袴



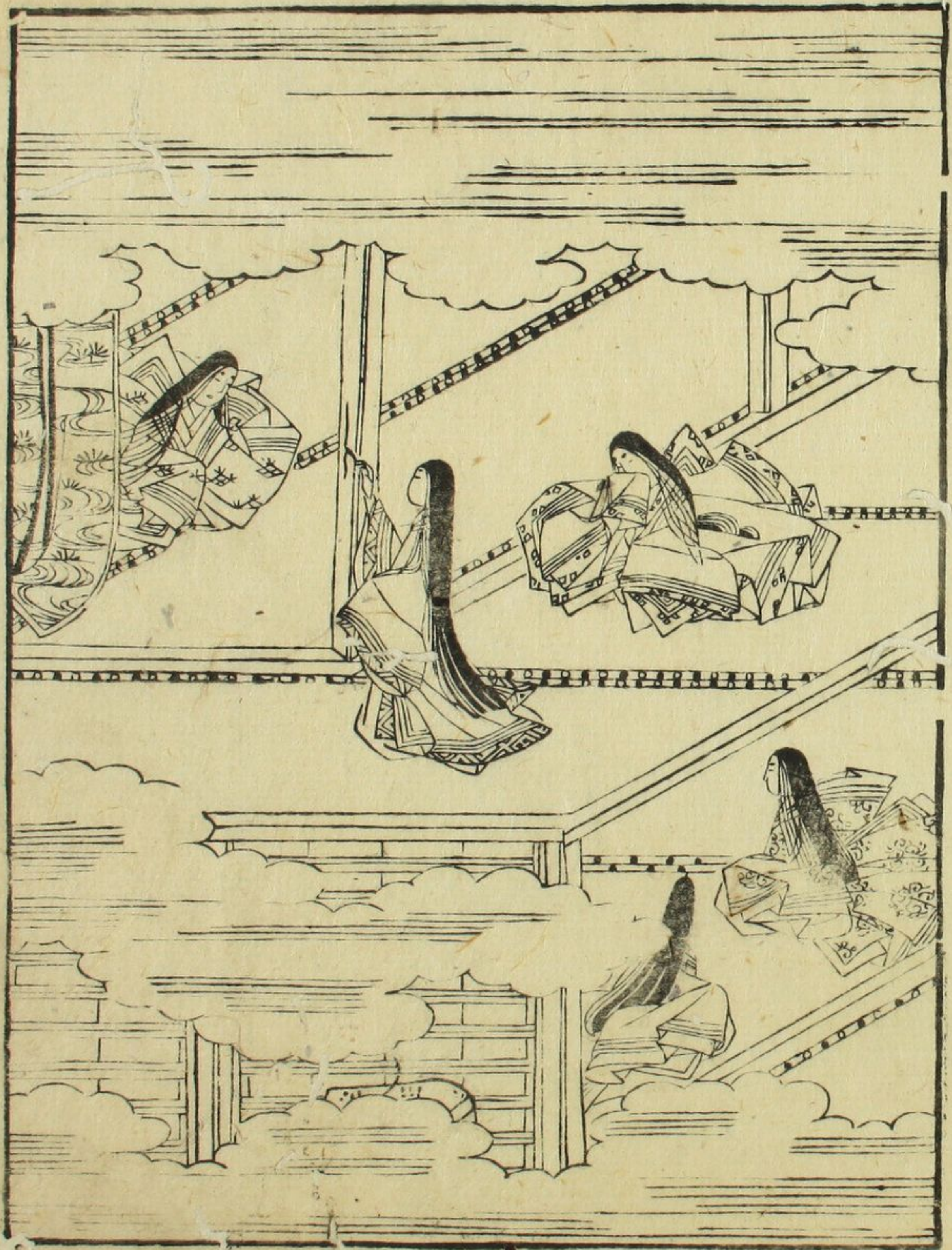
榎柱

あつし乃並

玉鬘に婚むる如世のたおれ小の言にぬれよ可
りの上出さるゝ其は十二三とらりるは婚むるに
けあつあゝ可みとてあて推れがまれば中入
わうと井乃とん事とて入給ふ也う乃清き
今いとして宿るまぬもる続る所く海貴の
柱よ我とりとあかともんよみ給ひなほし

真昌軒自安

浮世や文月哉うちい核く一死



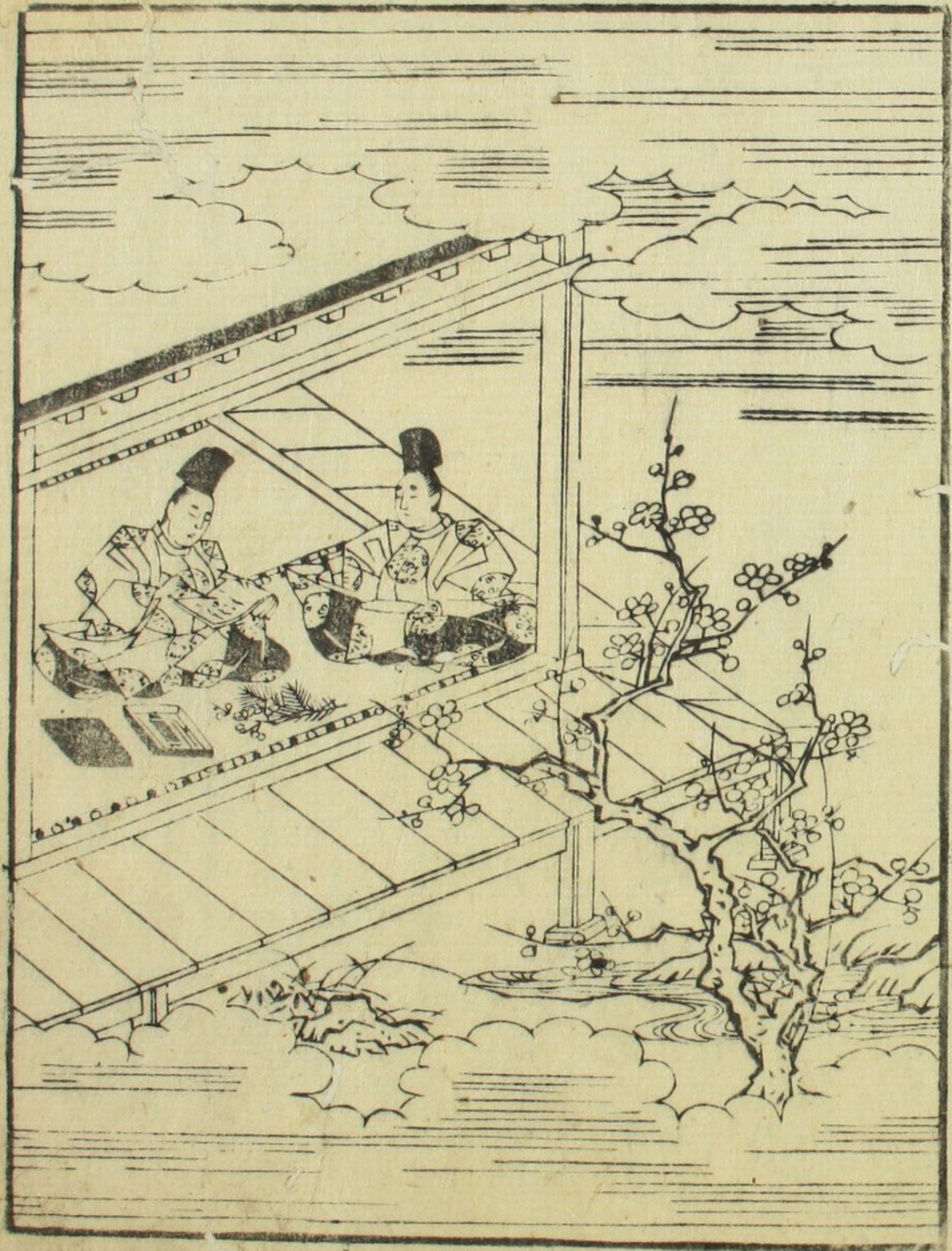
梅枝

正月廿四日比原氏のおとこ六條の院にて茶室拈合
阿利は權乃茶室乃方よりとあるところ梅の枝に
多付てあんなものも茶室は茶室拈入て五葉の枝に
はけ白く茶室は多付物入て梅をわけてむとていつを
あはれり

茶乃茶室の池のより枝乃の海と云はれん
神よあそくちまゆりやひやゆ也

梅乃山田住光貞妻

梅乃枝の家花はるや春有るの雨

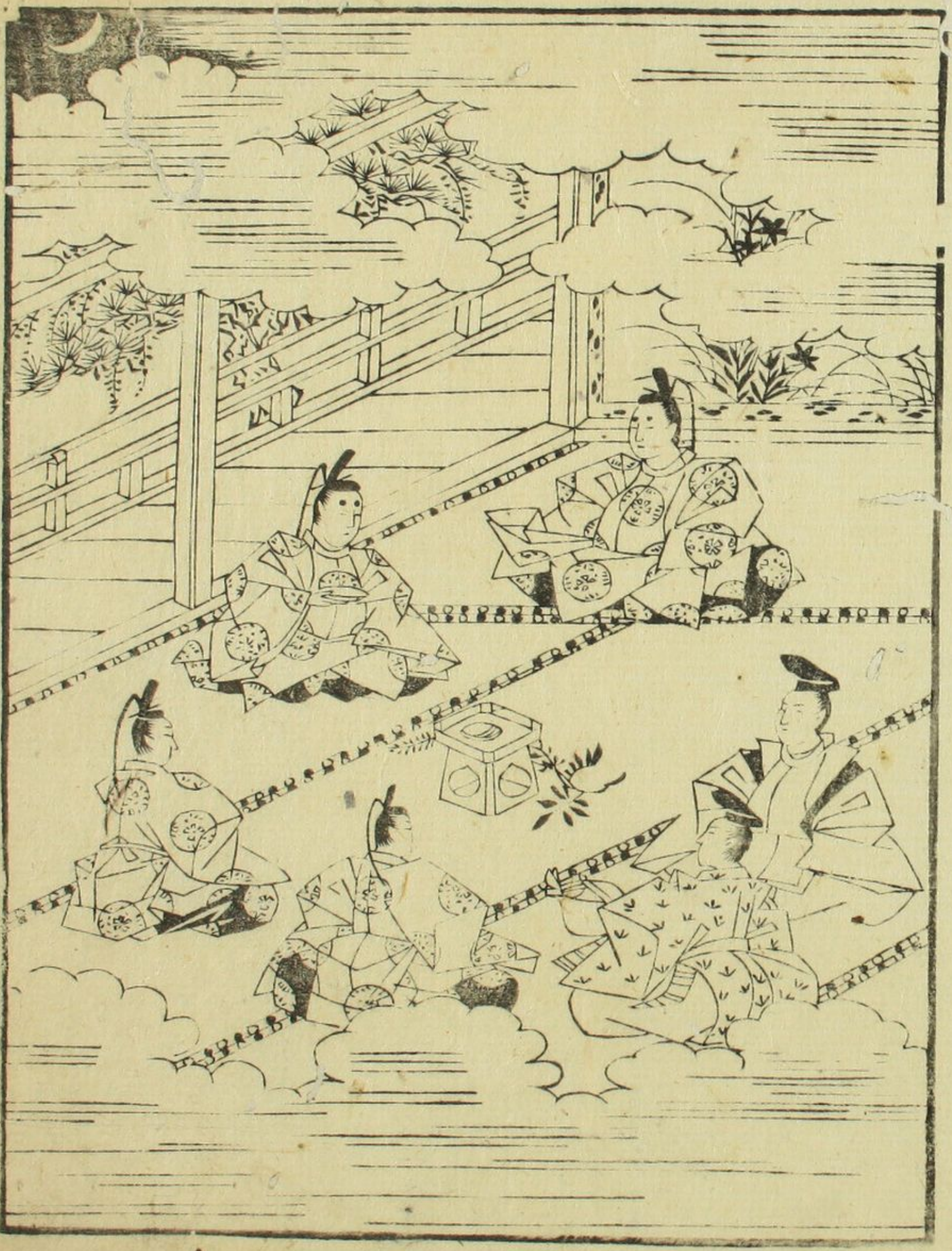


藤裏葉

雲井の鷹の姫君と夕雲の犬お思初て年々少海に
 父持りし娘いと抱も育まぬ免し娘らん清公
 中し山をれ若の威一犬將とよひ入て山遊あり山並乃
 此のぞ小父おとく若乃ら葉のとうらきさひあふけ
 喜目さ原あ乃ら葉あれうらとけとく
 若らあれかこしはうもらんあまふんれ
 う川よりすきてくまこあもきことと
 けいこうあらし露あけな春とさう一あま
 おまひもせわたりりりうら葉

奥西氏友三

歌のうたはたかきけいあなれらうはは



若菜上

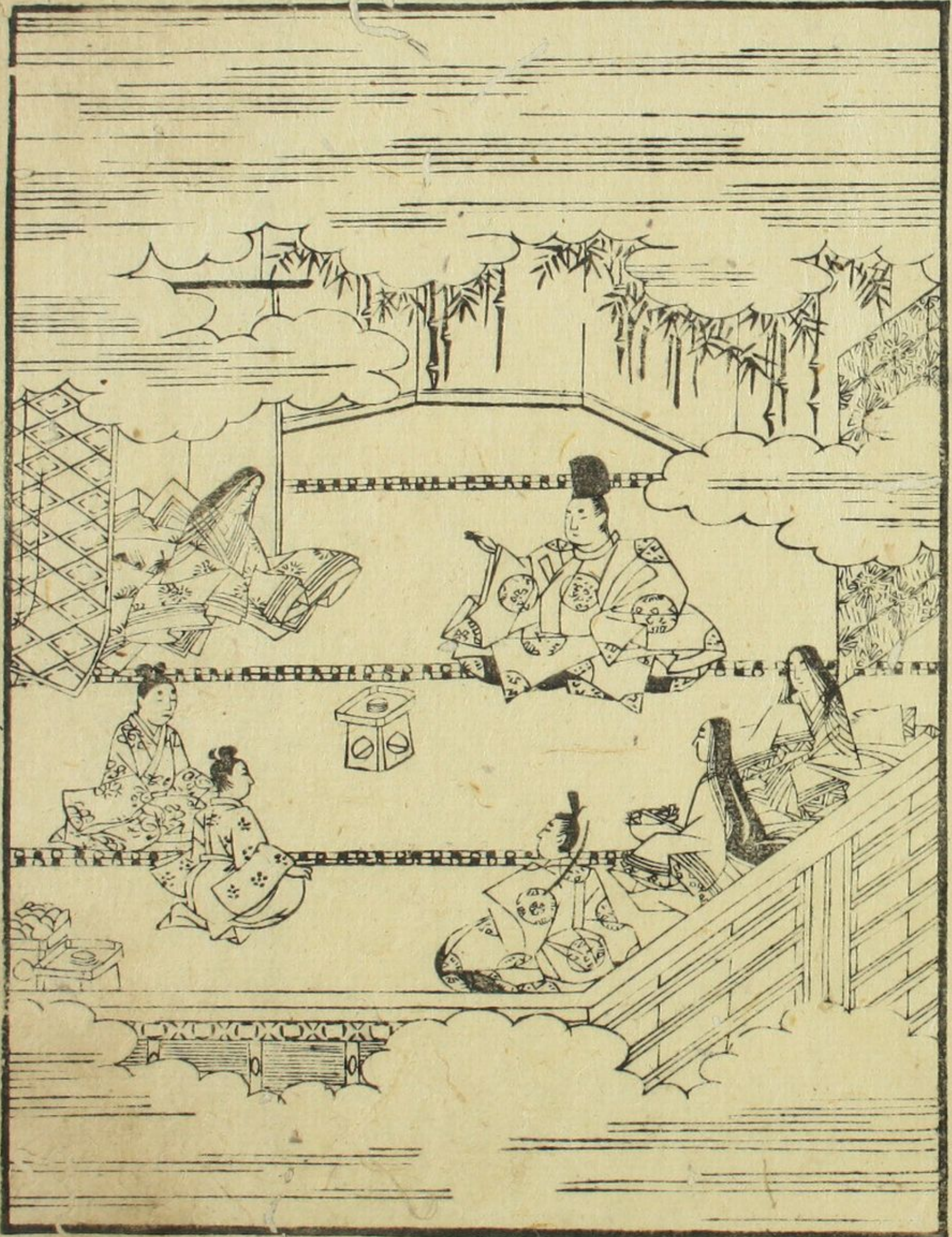
玉盤方や紙舞子居の中ふあきあきとあきあきとあきあきと
正月たうら子れ日の水鏡ひ小源氏院のうきうきとあきあきと
遊樂さあきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきと

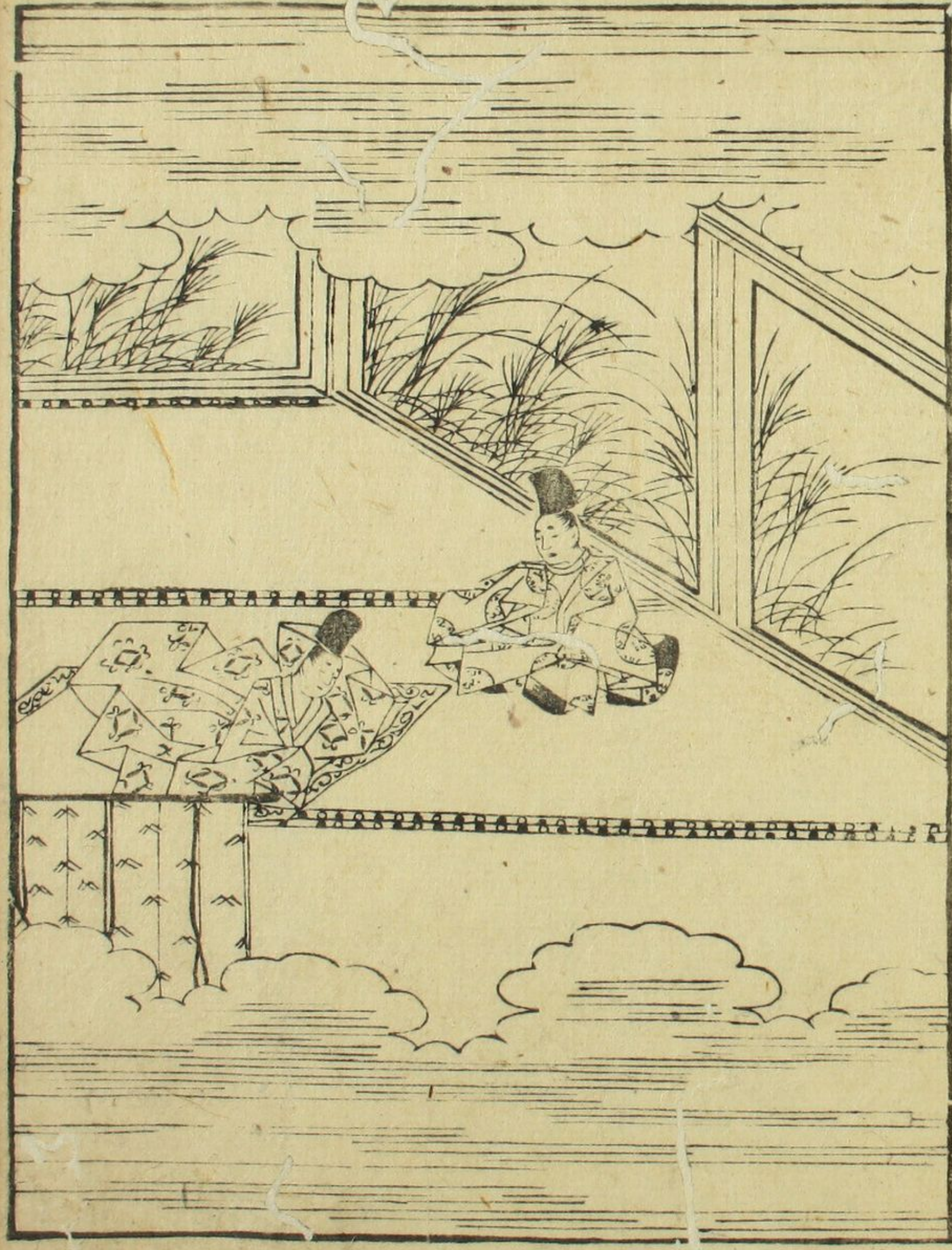
若菜らとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきと
あきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきと
あきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきと

あきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきと
あきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきと
あきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきと

荻野氏安靜

あきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきとあきあきと





拍木

早

月心雲客と月日早雲霞鳥乃美乃夢ふに
 あそびぬ毎よとりのんれも拍木あふまうへられん
 あ〜木とりの舞に色振木あふあり女に宮
 と見物なあそびまふひりつり人ならん

中河氏喜雲

源氏酒

くじやう〜と本れ

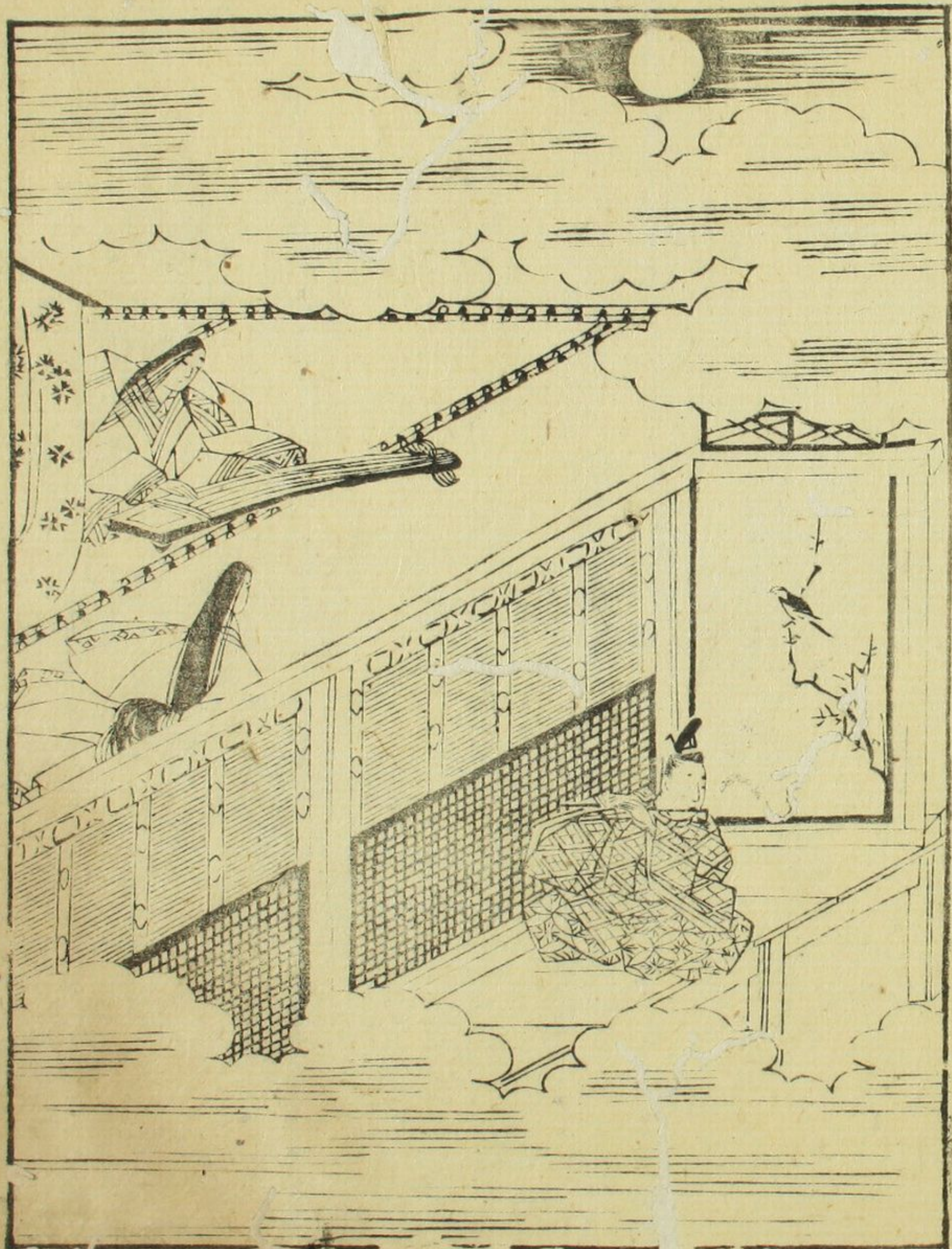
こいりから

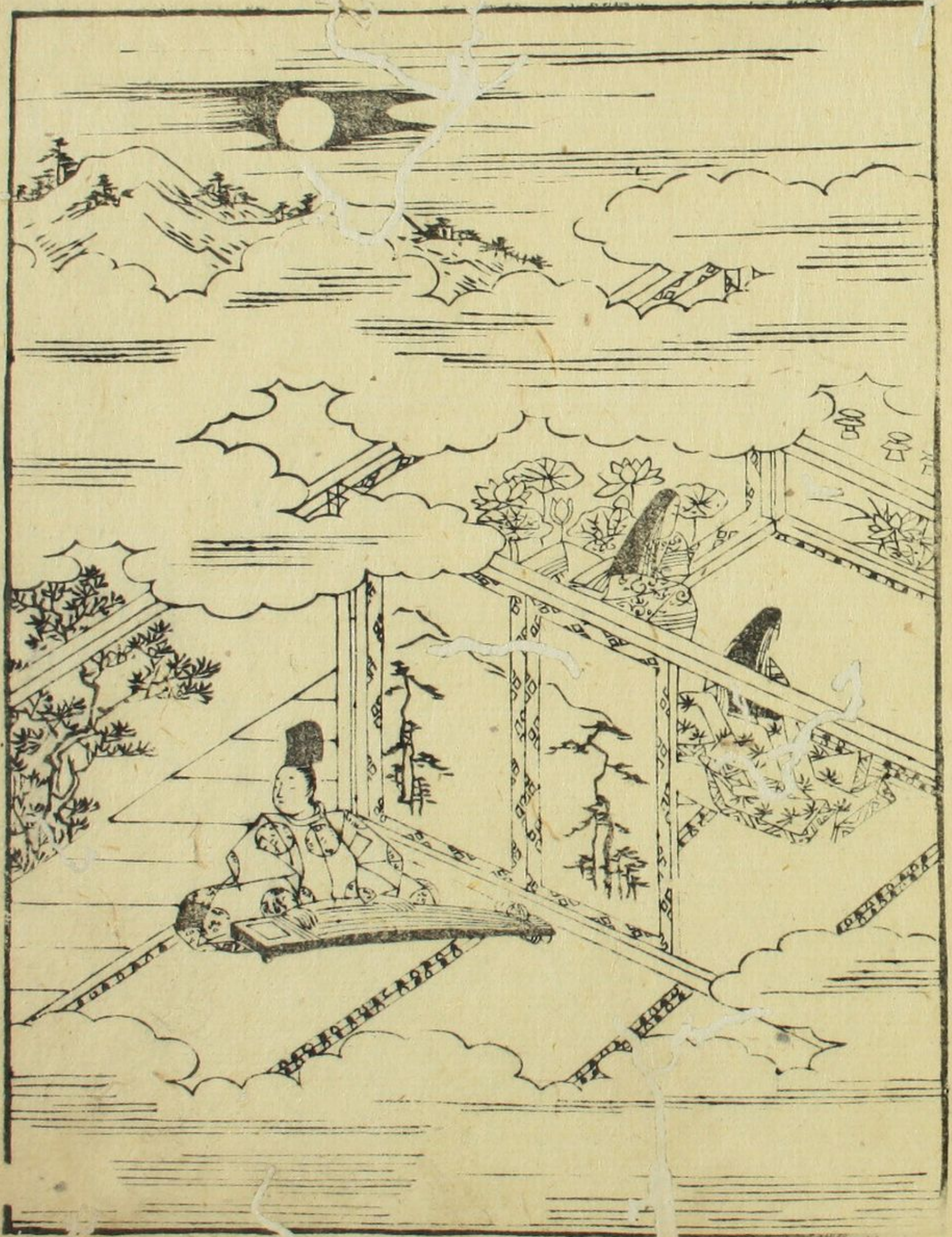
横笛

ちよりのんのも死てはわのうさ条のまへ落葉の夕雲の吊
 ひよ事終れ母れら息不れ契りとりと終ふれ終大ゆ糸
 けひく園のみとの音れ羨ふふたりしまひ内より帯
 とぬ出して大將よとめ終ひ中こそ故東の終れ帯と
 宣へて大ゆらうゆま入吹ひひくまらあくは終るの内
 てもすゆん終ふま時終るのま落葉の夕雲の吊
 夕雲横笛れまらるる魚のまらるるかたをぬと
ひかりくまらるる魚のまらるるかたをぬと

森田氏敏系秋

吹風のうらみ横笛や申とり





鈴虫

横笛の音

三

八月の中をわかれおりのうらみよきなりて限あく衣
 あまの六条院へ入る宮の方おいて月をいほ人よ
 ちよの前のあれ小ぶれしあつ虫とをれ中いほ人よ
 らもくあつた入たのま 大方の妹とくしとあつと
 源氏 わけてあつたあつと ちよの音 あつと ちよの音 あつと
 ちよの音 あつと ちよの音 あつと ちよの音 あつと

小村氏季吟

横笛の音にわかれ

あつと

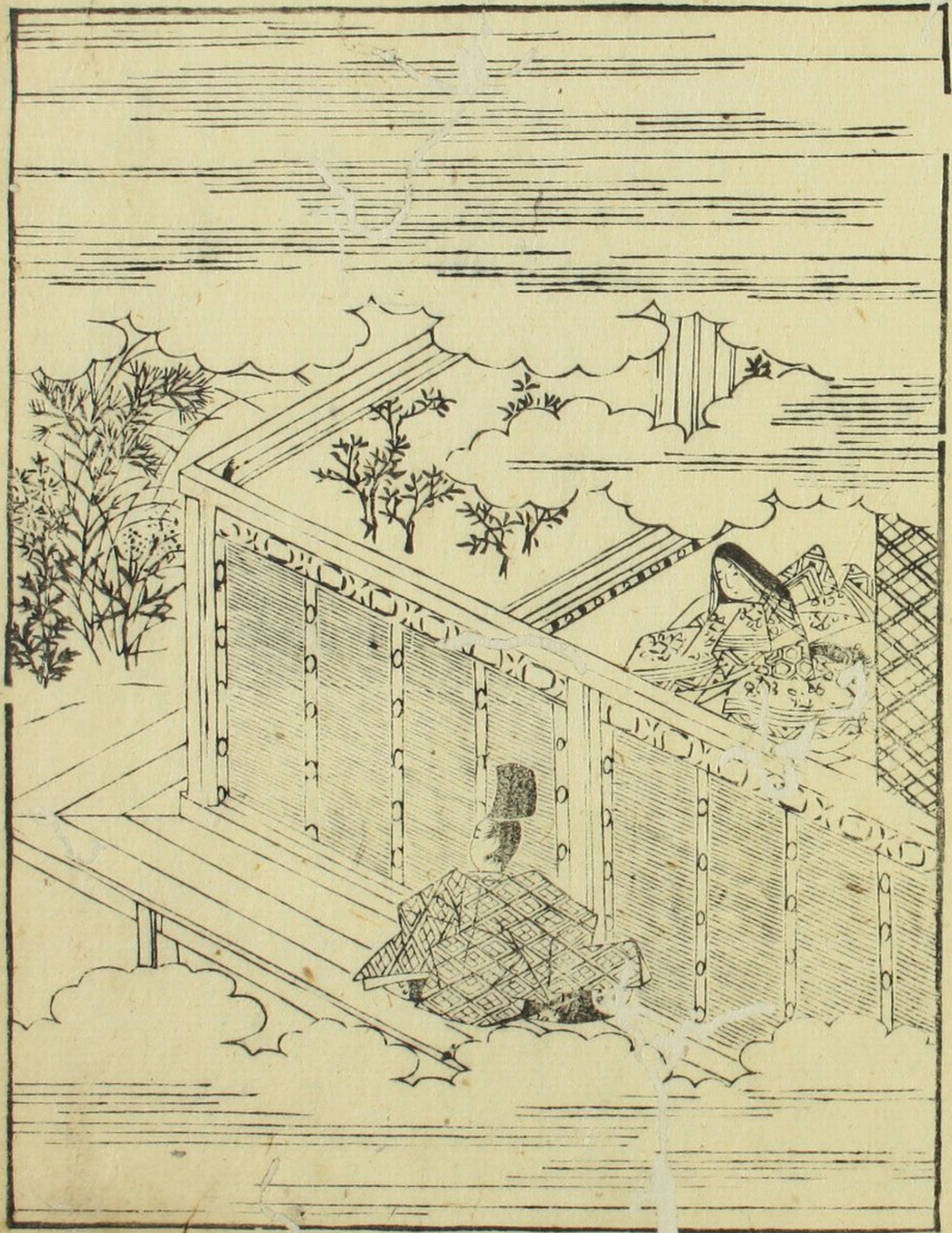
夕霧

大将小野母てよん路ひー清き

山道六あくられとそ梅う夕暮小立出む室も
お記心ちりして世あなむとそ大おと夕暮お大お
とりのお大將小野の通路二条乃まよんとくけ給
ひーなるり母々息下物れ掌にまつ〜ひのひて
小野あて清書性ま〜お小落葉のま〜と小野小
任とあふ

鶏冠井氏令清

夕霧乃ま〜のまふおわむ落葉丸



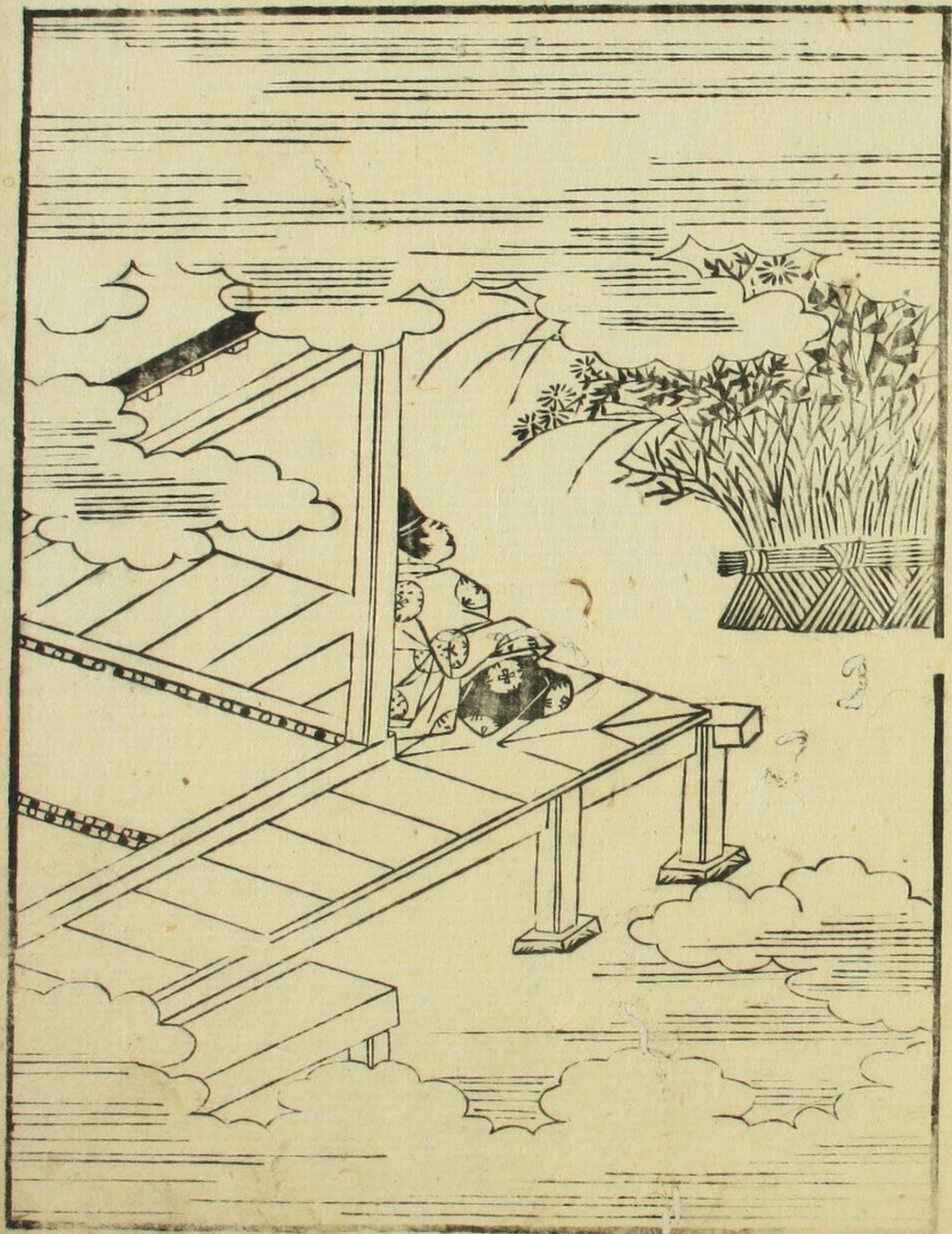
御法

此上あやと大事にて年比千部の法花經乃以位
 養のりし大法會を承生十ゆる也御法集んて
 御所のいとる備小む散里乃以方ひ景の上
 終ぬ養法ありそあれまうそせくんと
 しそよ中れらまの法花あぬ里
 じあひとて解つる給一六ふれ所のとあま
 乃のちりのとあまのり

江戸住玄札

麻乃角もおもはぬ法々二月堂





幻

四十五

源氏乃大臣清思のよき侍の者なり
 大なる誠なりよき侍なり
 行末の孫よき侍なり海濱なり

西村氏重後

うきやう

刀のふし

ゆき

魂

まじり

雲隠

雲く積る名河のよて実なり地水火風宜
穢乃六和合されく多祥あり教共されく解は
赤小魚とくくわさく一光原氏とやせはるる未
く積れり此處らとわらし

尾列名古屋一原氏友我

月之毛

毛

毛

毛

毛

毛



